

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00084

研究課題名（和文）人口減少時代のキリスト教と外国人宣教師

研究課題名（英文）The Role of Christianity and Foreign Missionaries in an Era of Declining Population

研究代表者

李 賢京（LEE, HYUNKYUNG）

東海大学・文学部・准教授

研究者番号：80584333

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は人口減少地域のキリスト教会を基盤とし、地域維持や住民との連携に果たす外国人宣教師の役割に着目し、現状把握のための実地調査と、日本の社会構造の変動および宗教性の変容への検討両面から取り組んだ。コロナ禍の影響で当初の予定通りに教団教派間・地域間の比較調査を実施することができなかったが、（1）過疎地域の課題に合わせた活動の展開、（2）宗教施設の保持および宗教者不足問題の解決に対応、（3）外国人宣教師をロールモデルとして多文化共生的な生き方が地域社会へ浸透などを明らかにした。また、コロナ禍におけるオンライン上での活動を取り入れることで、「動く教会」の新たな連携のアイデアを提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は人口減少地域において仏教宗派を中心に実施されてきた先行研究に、キリスト教の事例を加え、人口減少地域維持に宗教団体・宗教者の果たす役割についての統合的理解の提供に努めた。外国人宣教師の地域住民との連携、協働関係の構築を検討し、多文化共生の糸口として、宗教が地域社会に貢献し得る視点を見出した。以上から、本研究は従来の国内外での移民宗教研究や宣教師研究を大いに補完すると同時に、宗教の公共性が求められる現代日本社会の宗教者の役割について統合的視点を提供できると考える。

研究成果の概要（英文）：Based on Christian churches in depopulated areas, this study focuses on the role of foreign missionaries in maintaining local communities and collaborating with local residents. We conducted a field survey to understand the current situation and examined changes in the social structure and religiosity in Japan. Although we were unable to carry out comparative research among different denominations and regions as originally planned due to the COVID-19 pandemic, we were able to identify several key points: (1) the development of activities tailored to the challenges of depopulated areas; (2) the maintenance of religious facilities and solutions to the shortage of religious personnel; and (3) the spread of a multicultural lifestyle within local communities, with foreign missionaries serving as role models. Additionally, by incorporating online activities during the pandemic, new ideas for collaboration among "churches on the move" were proposed.

研究分野：宗教学

キーワード：人口減少 キリスト教 外国人宣教師 地域社会 宗教者 宗教施設 信仰継承 動く教会

1. 研究開始当初の背景

人口減少社会に突入した日本において、人口減少問題と宗教をテーマとした研究が盛んに行われている。そこでは、実証的なデータをもとに宗教界および日本社会へ提言する研究が進められている(石井 2016、櫻井 2017)。これら研究は、人口減少の背景を踏まえ、日本の社会構造や宗教性の変容などと関連付け、教団として生き残るために時代に合わせた対応について論じている。だが、いずれも仏教宗派に集中し、キリスト教など他宗教についてはあまり目を向けられていない(川又 2017)。

本研究で対象とするキリスト教は、日本ではマイナーな宗教ではあるが、過疎高齢化の進んだ地域に目を向けたとき、社会的に「無視」あるいは「排除」されてきた領域において、キリスト教会が対応している事例(秋田、長崎、奄美大島など)が多々見られる(杉山 2015)。人口減少地域における教会の消滅は、彼らの信仰生活だけではなく、これまで教会を基盤として保持されてきた信者同士の支えあい、教会外の地域の人々との連携、地域福祉など生活に必要な資源が消滅することを意味する。このように、人口減少地域において宗教施設が社会関係の結節点として機能し、宗教者が地域維持に果たす役割は大きい。しかし、従来の研究は、エスニックチャーチを基盤とする外国人信者の日本での宗教・日常生活や、外国人信者が日本人信者数を上回る教会が増えている現状から多文化共生推進の担い手としての宗教組織に注目した研究に大別し、宣教師への目配りは不足している。

2. 研究の目的

本研究では、今日人口減少地域において数々の貢献活動を行っている教会と宗教者の存在に着目する。人口減少問題において宗教は周辺的位置に追いやられてしまいがちだが、深刻化する人口減少地域の今日的状況に鑑み、そこでの宗教者・団体の役割を問うことは、当該研究の裾野を広げ、問題をより先鋭化し得るものとする。また、年々増えつつある外国人宣教師への目配りも欠かせない。過疎地住民が外国人宣教師との連携、協働関係の構築を検討することは、多文化共生の糸口を提供するものであり、宗教が地域社会に貢献し得る視点を見出すことが、本研究の最終的な到達地点である。

そのため、本研究では、人口減少地域における宗教者・団体の実証的な研究を参照しながら、過疎地域の教会調査を実施し、既存の人口減少地域における仏教寺院と、都市部の教会と比較分析を行う。これらの作業を通して、宗教団体・宗教者が地域社会・住民に対してどのような機能を果たし得るのか、新たな連携のアイデアを提示する。

3. 研究の方法

本研究は、過疎化・人口減少社会日本におけるキリスト教会と外国人宣教師を対象に、現状把握のための実地調査(参与観察・聞き取り調査)と、日本の社会構造の変動および宗教性の変容への検討両面から取り組む。その際、従来仏教宗派を中心として実施されてきた先行研究と比較検討を行い、人口減少地域維持に宗教団体・宗教者の果たす役割についての統合的理解を提供する。本研究の当初の年次計画は下記の通りであるが、コロナ禍の影響で、他宗派・他地域への比較調査を実施することができなかったため、研究期間を1年延長し、取組事例の収集に努めた。

【1年目】 人口減少地域における宗教者・団体の実証的な研究を参照しながら、各地の過疎化・高齢化実態に加え、キリスト教会の歴史的経緯・展開過程・現況などを把握する。教団教派付設研究所の資料等も参照しながら、各教団教派の過疎対策に関する取組例を収集し、教団教派間・地域間の比較分析を行う。

【2～3年目】 初年度で得られたデータをもとに、調査可能な教会を選出し、調査を依頼する。承諾を得た教団・教会の牧師・司祭・関係者等に、当該地域での過疎化や高齢化への対応に加えて、外国人宣教師の地域社会への参加、住民との連携等の取組事例を収集する。人口減少の背景を踏まえ、日本の社会構造の変動、宗教性の変容などと関連付け、調査地域・住民と教会・宗教者との関係を理論的に考察する。国内外学会で報告を行い、参加者からのコメントを集約しながら検討する。

【4年目】 類似する過疎化・高齢化問題をかかえる地域間比較および教団教派間比較を行い、より幅広い観点から考察する。また、調査計画・成果を振り返りながら、データが不足している部分について補足調査を行う。研究成果報告として、国内外で報告を行い、参加者からのコメントを集約しながら検討する。

【5年目】 既存の人口減少地域における宗教研究との比較を通して、今後、キリスト教会と外国人宣教師が地域社会・住民に対してどのような機能を果たし得るのか、宗教を越えて信徒や地域住民の支えあいが果たす機能について、新たな連携のアイデアを提示する。研究成果報告として、国際学会にて現実にむけた実践例の分析を報告し、参加者からのコメントを集約し、検討および取りまとめを行う。

4. 研究成果

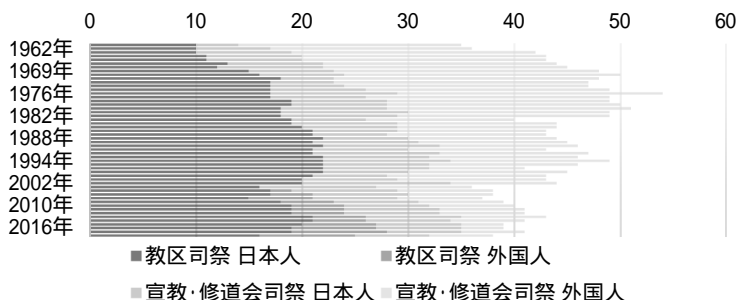
本研究は、コロナ禍の影響で当初の予定通りに教団教派間・地域間の比較調査を実施することができなかったが、以下の3つの作業を通じて宗教・宗教者が地域社会に貢献し得る視点を導き出すために努めた。人口減少地域における宗教者・団体の実証的な研究を参照しながら、各地域におけるキリスト教会の歴史的経緯・展開過程・現況などを把握し、比較研究を行った(李 2020、2021)。②過疎地域(函館、新潟、長崎、鹿児島、奄美)の教会調査を実施し、各地における教会の過疎化や高齢化への対応に加えて、外国人宣教師の地域社会への参加、地域住民との連携・社会支援など、生きた事例研究を拡大しながら、教会と外国人宣教師が果たす役割を明らかにした(李 2018、李・田島 2020)。既存の人口減少地域(東広島)における仏教寺院と、都市部(札幌、横浜、名古屋、博多)の教会調査を実施し、比較・対比を通して、宗教団体・宗教者が地域社会・住民に対してどのような機能を果たし得るのか、新たな連携のアイデアを提示した(李・庄司 2023、李 2024)。

(1) 過疎地域の課題に合わせた活動の展開

函館、新潟、長崎、鹿児島、奄美など、調査対象の過疎地域は、人口減少と高齢化の進展が顕著であり、働き手不足により近年ベトナム・フィリピンなどの技能実習生が増えている点で共通している。そんな中、キリスト教会の外国人宣教師たちは2~6教会を1、2人で兼務しながら、住民の大半を占める高齢者のために老人会の世話や安否確認、用足しなどを行っている場合が多い。信者の高齢化や施設維持に苦しむ日本の教会において、彼らは教会や地域維持・活性化の起爆剤として大いに期待されていたのである。さらに、コロナ禍において地域の関連団体やフードバンクなどと連携し、技能実習生への支援活動や外国籍住民との協働関係を構築しているケースが多く見られた。外国籍住民への対応は過疎地域に限られたものではなく、近年日本全国で広く実施されているが、過疎地域の外国人宣教師は高齢化問題に加え、地域と外国籍信者の仲介役を兼ねていることが実地調査で明らかとなった。ただし、離島奄美では、外国籍住民自体が少ないため、高齢者向けの活動が主であり、他の過疎地域と相違点を見せた(李・田島 2020)。以上から、過疎地域の地域的課題に合わせて教会と外国人宣教師が活動を展開していることが示された。

(2) 宗教施設の保持および宗教者不足問題の解決に対応

今日、日本における宗教者不足問題は教会をはじめとする宗教団体・施設の存続・維持に大きな影響をもたらしている。人口減少地域における宗教施設の消滅は、彼らの信仰生活だけではなく、これまで教会を基盤として保持されてきた信者同士の支えあい、地域の人々との連携、地域福祉など生活に必要な資源が消滅することを意味する(李・庄司 2023)。そこで、近年、過疎地所在の巡回・無任教会の増加、牧師・司祭不足といった問題を解決すべく、とりわけ日本のキリスト教界では、日本人宗教者ばかりではなく、とりわけ韓国やベトナム、フィリピンなどアジア出身の宣教師を、教団教区所属牧師・司祭として迎え、過疎地域に派遣するケースが増えている(李 2020)。たとえば、カトリック鹿児島教区では年々教区司祭として迎えている外国人宣教師が増加している(図：鹿児島教区聖職者(司祭・助祭)数の推移(1962-2019年))。従来、日本のカトリックでは海外の教区に宣教師派遣を要請し、海外教区所属のまま司牧活動を担ってもらったが、近年では日本の教区所属の司祭として定年まで活動し続けるケースが増えている。



キリスト教がマイノリティである日本のような社会では、家族の信仰となっていないキリスト教信者が教会と疎遠になった場合、教会と接点を再度持つ機会に恵まれず、遠ざかったままになる場合が多い(川又 2016)。高齢化や信仰継承の困難などで信者がますます減っているが、中には信仰を守りたいと切実に願っている信者たちがいる。教会が存続し、定期的に司祭がやってくる、そしてミサに参加することができる環境は、その接点を守るための必須事項といえよう。その役割を外国人司祭たちが担うことによって、何とか教会・信仰維持ができていているという現状がある(李 2020)。宗教者不足問題、教会存続危機に対応するための新たな仕組みを設けたのである。

(3) 外国人宣教師をロールモデルとして多文化共生的な生き方が地域社会へ浸透

過疎地域だけではなく、都市部においても外国人宣教師が活動を展開するためには、彼らの活動をサポートする日本人信者の献身的な役割が欠かせない。調査対象の多くの教会では、幼稚園や高齢者福祉、言語・料理教室、バザー、コンサートの場として教会を積極的に外部の人々に開き、教会外の地域の人々との連携を重要視していた。また、ホームレス支援、外国人の収用問題、人権・労働問題など、これら教会では外国人宣教師をサポートし、信徒会運用やホームページでの情報発信、ボランティアなど、広範囲にわたり日本人信者が献身的に教会運営を支えていた。牧師・司祭と信者、さらには地域住民との間に信仰の有無に関わらず国境を

越えた信頼関係が築かれているケースも見られた。宗教者をロールモデルとして、多文化共生的な生き方が地域社会へ浸透していき、それが結果的に多文化共生の基盤になっていった好例であると考えられる。

(4) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

国内外での移民宗教研究や宣教師研究を大いに補完

1980年代以降、欧米出身の宣教師は減少する一方、東・東南アジアや南米から来日する外国人の増加とともに、キリスト教信者も急増し、それと同時に宣教師も増えている。しかし、従来の研究は、エスニックチャーチを基盤とする外国人信者の日本での宗教・日常生活や、外国人信者が日本人信者数を上回る教会が増えている現状から多文化共生推進の担い手としての宗教組織に注目した研究に大別し、宣教師への目配りは不足していた。近年、同じエスニシティを基盤とせず、日本の教団・教区に所属しながら人口減少地域の教会や地域維持のため活動している外国人宣教師が増えているが、これに注目した研究は管見の限りない。

以上から、本研究は、過疎地所在の教会を基盤とし、地域維持や住民との連携に果たす外国人宣教師の役割に注目することで、従来の国内外での移民宗教研究や宣教師研究を大いに補完すると同時に、宗教の公共性が求められる現代日本社会の宗教者の役割について統合的視点を提供できると考える。また、日本国内の人口減少において仏教宗派を中心に検討されてきた研究に、キリスト教会の実践例を検討することによって、視点の拡大に貢献できると考える。

②新たな連携のアイデアの提示

コロナ禍において、キリスト教を含む多くの宗教は従来の対面での活動に加え、オンライン上での活動を取り入れることで、信者の参加を促し、教会の持続可能性を見出すことができた(李 2023)。いわゆる、オンライン導入による宗教のハイブリッド化がみられた。オンライン導入による宗教のハイブリッド化は、新たな宗教のあり方、また「移動」が常である現代の宗教維持の可能性を示唆するものである。

一方、進学や就職、結婚などで信者は活発に「動く」。「動く信者」たちのために、都市教会と地方教会の連携が重要であり、オンラインでの交流が一つの解決策となる。現代の地域社会にみられる課題は、都市への人口の集中であり、とりわけ若者は地方から都市への移動を望む。その際、都市と農村の連帯を如何に保つかという事を考える必要があり、宗教の面においては、「送り出す教会」(地方)と「迎える教会」(都市)との連携によって、信者同士の交流や教会学校・キャンプなどの共同開催などをし、教会および宗教者が信者たちの信仰生活の維持を支援する必要がある。人口移動が頻繁に行われる現代日本社会だからこそ、「動く信者」が都市や地方の教会で自由に参加できるような体制づくりが必要であり、それと同時に柔軟性を持ったオンラインでのつながりの場を提供することで、「移動」しても信仰生活を維持できる仕組み作りが必要である。つまり「動く教会」の概念を取り入れ、場所を選ばなくてもよいオンラインを通じた交流が、「動く信者」に対して新たな関係性の構築に寄与し、信仰生活の継続につながると考えられる。オンライン化が加速化した今、「動く教会」のあり方を検討する必要があり、その際、宗教者の役割が「移動社会」における信仰継承の糸口となることと考える。

【引用文献】

- 石井研士(2016)「宗教法人と地方の人口減少」『宗務時報』120号。
- 櫻井義秀(2017)『人口減少時代の宗教文化論』北海道大学出版会。
- 川又俊則(2016)「人口減少時代の教団生存戦略 三重県の伝統仏教とキリスト教の事例」寺田喜朗・塚田穂高・川又俊則・小島伸之編著『近現代日本の宗教変動 実証的宗教社会学の視座から』ハーベスト社。
- 川又俊則(2017)「教団会計と意識調査にみる人口減少時代の維持困難さ」『宗教研究』91(2)。
- 杉山博昭(2015)『「地方」の実践からみた日本キリスト教社会福祉』ミネルヴァ書房。
- 李賢京(2018)「韓国人ニューカマーとキリスト教会の変容 多文化共生の拠点へ」『現代日本の宗教事情 国内編Ⅰ (いま宗教に向きあう 第1巻)』岩波書店。
- 李賢京(2020)「人口減少時代の奄美群島とカトリック」『東海大学紀要 文学部』110。
- 李賢京(2021)「奄美における人と宗教の移動に関する社会学的考察 奄美カトリック教会アンケート調査の結果から」『東海大学紀要 文学部』111。
- 李賢京(2023)「コロナ禍における移動と宗教-社会的空間の再構成と「動く」信者に注目して」川又俊則・郭育仁編著『次世代創造に挑む宗教青年-地域振興と信仰継承をめくって』ナカニシヤ出版。
- 李賢京(2024)「都市・地方でのカトリック青年会活動の現状と展望-フィールドワークから」『福音宣教』2024年5月号。
- 李賢京・庄司知恵子(2023)「地域のコミュニティとしての宗教施設 東広島市福富町久芳地区の正覚寺を事例に」『東海大学紀要 文学部』113。
- 李賢京・田島忠篤(2020)「離島奄美大島における宗教とトランスナショナリズム」『宗教研究』94-2。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 6件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 李賢京, 庄司知恵子	4. 巻 113
2. 論文標題 地域のコミュニティとしての宗教施設 東広島市福富町久芳地区の正覚寺を事例に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東海大学紀要 文学部	6. 最初と最後の頁 47-65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 清水香基・李賢京・町泰樹・田島忠篤	4. 巻 第44号
2. 論文標題 奄美大島創価学会と社会移動に関する一考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 沖縄国際大学南島文化研究所紀要『南島文化』	6. 最初と最後の頁 23-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 李賢京	4. 巻 111
2. 論文標題 奄美における人と宗教の移動に関する社会学的考察 奄美カトリック教会アンケート調査の結果から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東海大学紀要文学部	6. 最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 李賢京、田島 忠篤	4. 巻 94
2. 論文標題 離島奄美大島における宗教とトランスナショナリズム	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 宗教研究	6. 最初と最後の頁 3~28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20716/rsjars.94.2_3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 李賢京	4. 巻 第110輯
2. 論文標題 人口減少時代の奄美群島とカトリック	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東海大学紀要文学部	6. 最初と最後の頁 35-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 李賢京、田島忠篤	4. 巻 第83号
2. 論文標題 戦後奄美大島におけるカトリック・ブラジル移住者たちのライフ・ヒストリー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本研究	6. 最初と最後の頁 89-113
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計9件(うち招待講演 4件/うち国際学会 3件)

1. 発表者名 李賢京
2. 発表標題 民主化以後の韓国キリスト教会の政治参与
3. 学会等名 ワークショップ「戦後東アジアの社会運動とキリスト教 東アジアの連帯という視点から」(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Hyunkyung Lee
2. 発表標題 Foreign Technical Intern Trainees and Catholic Church in Japan
3. 学会等名 The 36th ISSR(International Society for the Sociology of Religion) Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 李賢京
2. 発表標題 人口減少時代における日本の宗教と外国人宣教師の役割 奄美大島のカトリックを中心に
3. 学会等名 2020韓国宗教学会50周年記念学術大会（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 李賢京
2. 発表標題 動く信者と、送迎教会（送りだす・迎える）の可能性を考える
3. 学会等名 科学研究費補助金研究「伝統宗教の『次世代教化システム』の継承と創造による地域社会の活性化」オンライン研究会（17K02243、研究代表：鈴鹿大学こども教育学部教授 川又俊則、2017～2020）（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Hyunkyung Lee
2. 発表標題 Amami Islands and Foreign Missionaries in the Age of Globalization and Depopulation : Focused on an Analysis of Catholic Kagoshima Parish Newsletter
3. 学会等名 The 2nd Annual Conference of the EASSSR(East Asian Society for the Scientific Study of Religion)（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 李賢京
2. 発表標題 離島教会の現状と課題 奄美カトリックを中心に
3. 学会等名 北海道宗教学研究会第9回研究例会＆「宗教と社会」学会「東アジアにおけるキリスト教の越境と交流」プロジェクト共催
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 李賢京
2. 発表標題 地方都市における外国人住民と教会 多文化共生の視点から
3. 学会等名 科研ワークショップ「宗教とウェルビーイング：神話・キリスト教会」科研基盤研究（B）（19H01554）（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 李賢京
2. 発表標題 日韓における地域社会と宗教的コミュニティ研究の成果と課題 キリスト教コミュニティを中心に
3. 学会等名 「コミュニティと生活」研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 李賢京
2. 発表標題 韓国の大学において日本の宗教文化はどのように教えられているのか 教えられる側と教える側の両方の経験から
3. 学会等名 科研研究報告会「韓国の大学における日本宗教教育」科研基盤研究（B）（18H00615）（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 池澤優編・藤原聖子編・堀江宗正編・西村明編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 224
3. 書名 現代日本の宗教事情 国内編Ⅰ (いま宗教に向きあう 第1巻)	

1. 著者名 川又俊則編・郭育仁編	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 196
3. 書名 次世代創造に挑む宗教青年：地域振興と信仰継承をめぐる	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------